



自治労音協通信

第74号
2012年1月1日発行

発行責任者 会 長 磯野 友一
編集責任者 事務局次長 小川 典子

行く年来る年☆2011ダイジェスト

第3回自治労音協コンサート 北から南から大集合

7月1日(金) 午後6時から高松市文化芸術ホール(サンポート)アートヴィレッジのリハーサル室に、全国から50人が参加して第3回自治労音協コンサートを開催した。



三線で歌う高田義徳さん



ゲスト「真紅」の青木ファミリー(長野)



オープニングのシングアウト

新春のお慶びを申し上げます

昨年は、高松ではたらくものの音楽祭に多くの会員のみなさまと出演することができました。二〇一二年は栃木県で開催されます。日常の成果を発表する場として、日音協に結集し働くものの文化活動を交流し前進させていきましょう。

自治労音楽協議会会長 磯野 友一

2012年 元旦

第44回はたらくものの音楽祭IN高松



第44回はたらくものの音楽祭合唱

♪ 事務局から のお知らせ

みなさまからの投稿をお待ちしています！

E-Mail: jicogawa@jca.apc.org 住所変更は必ずお知らせください！

『自治労音教ホームページ』 <http://www.jca.apc.org/~jicogawa>

『自治労と音楽のページ』 <http://www33.ocn.ne.jp/~tmatsu>

『日本音楽協議会』 <http://www.yomogi.or.jp/~uncle>

音楽道

セレモニーとパフォーマンスで楽しいひと時を過ごす
ミャンマー軍事独裁政権の迫害から逃れてきた少数民族の図書館を支援

荒川区職労 白石 孝



図書館に集まった子どもと図書館スタッフ

激しい戦闘のさなか、あるいは戦争映画にも音楽や演劇の場面大災害の直後であっても、生きが数々登場する。残った人びとは生きる営みを続け「戦場のピアニスト」という。動物のことはよくわから名作しかり、「旅芸人の記録」ないが、人間には空気を吸い、水で有名なギリシャの名監督テを飲み、食べ、子孫を残すというオ・アングロプロスの「霧の中根源だけでなく、心と頭のための風景」では、まさに霧の中か何かが必要だ。

だから、どんな困難な状況にがった場面が強烈な印象となつあつても音楽や演劇などは必須のものであり、そしてもうひとつ重教育もそうだ。

近年ではカンボジアでもアフガンでもイラクでもいち早く学校が再開される場面が度々報道されている。大震災の被災地でもそうだし、津波や原発で避難している先でも同様だ。また、図書館や移動図書館も再建されたりしている。最近でこそ民主化への兆しが報道されているが、ミャンマー（ビルマ）軍事独裁政権は、長年にわたってカレン族やシャン族などの少数民族への弾圧や抑圧を続け、その結果、多くの人びとがタイやバングラディッシュとの国境を越えて逃れ、難民となっている。

タイとミャンマーの2千キロにわたる国境には、現在も9の難民キャンプが開設され、約15万人がそこに暮らす。長い人で1984年開設から27年の長きにわたり、自分の家、村、国を離れ、そして管理された狭い空間の中で暮らしている。広大過ぎるから「キャンプ」という印象を与えないパレスチナ難民キャンプでも、50年、60年の歳月が流れている。ミャンマーからの避難民の将来はどうか。選択肢は三つ。帰還することが一番だが、軍事政権の「軟化」がいつ帰還に繋がるのか、現地からはまだその声が聞かれない。

次は「第三国定住」といい、主に欧米各国への「移民」だ。すでに7万人以上が米、豪、カナダ、ノルウェーなどに移り住んでいる。クリント・イーストウッド監督の「グラン・トリノ」で描かれていたのは、ラオスから逃れたモン族の米国移民家族だが、移民先での様々な苦勞や軋轢があり、特に高齢者には厳しい選択で、若い世代中心の第三国定住といえる。昨年からは日本でも受け入れが始まったが、完全にミスマッチし、後続の希望者はなかなか出ないほど評判は悪い。そして最後の選択がキャンプで引き続き暮らすことだ。

だが、キャンプでは「希望」をどう見出したらいいのか。国連難民高等弁務官事務所とタイ内務省によって管理され、欧米のNGOの協同事業で食糧配給や医療、教育は一定保障されているが、高校や職業訓練校で教育を受けても、それを活用する場がない。タイは周辺国からの政治・経済難民の流入を認めず、タイで正式に職を確保することは出来ないから、勉強してもその未来に期待は出来ない。でも、でも、だが、教育を求める声も実態もある。というところで、日本から唯一ミャンマー難民キャンプに入っている国際協力NGO「公益社団法人シャンティ国際ボランティア会」が運営する図書館と民族絵本出版の支援に私たちが取り組んでいる。

図書館は7つのキャンプに21館あり、これまでは恒久的な部材の使用が認められず、竹などで組んだ粗末な建物だったが、ようやく堅固な仕様が許可され、その建替えを支援し、贈呈式のためにタイへと向かった。

11月はじめ、バンコク経由チェンマイへ、そこから車で4時間の町（メーサリアン）をベースとし、さらに800メートルを越える山岳悪路を3時間、メラウキャンプに到着する。

雨季が明けた時期でも4輪駆動のトヨタハイラックスでようやく到着。途中轍にはまったトラックを「救出」するなど、雨季の盛りではたどり着けないような、狭隘な山岳地域に位置している。

さらに、ひとつのキャンプの高低差は300メートル以上、谷川に面した家から小高い山のてっぺんにまで、高床式の家がひしめく。

11月4日、キャンプの住民委員会を訪問した後、図書館の贈呈式を行った。狭い図書館に集まった子どもと図書館スタッフにユースボランティアは250人。セレモニーとパフォーマンスで楽しいひと時を過ごすことが出来た。

●お問い合わせは、白石まで。

03-3806-6308

taidou@ten-catv.ne.jp

私のギター人生 パート12

ギターに魅せられて

狭石 利美(東京)

初々しく晴れがましい顔、顔

いよいよラグリマ第一回コンサートが始まった。最初は勢いよく合奏で、しかもラスゲアドも入った「パッサカリエ」(ボツシュ)にした。モーツァルトやビバルディなどの他「アンジェリータ」「霧のカレリア」など親しみやすい曲を中心にプログラムを組んだ。

この頃はメンバーも5人で三部合奏の編曲が中心だった。聴衆はセンターの仲間を中心に五、六十人いたのだろうか。

ラグリマのメンバーのあの新鮮な顔、顔、顔、本当にみんな初々しかった。ああいうのを晴れがましい顔というのだろう。私にとってはちゃんとしたステージで演奏するのは73年にセンターが滝野川会館で催した「文化の集い」で「ラグリマ」を弾いて以来2回目である。

そのときは独奏だったが、今回は最初に合奏だから気持ちに余裕がある。またマイクなどの音響装置も使わなかったの、お互いの音も良く聞こえてほぼ練習どおりの演奏が出来た。

もしかすると本番の高揚感も手伝って練習時より気持ちの入った演奏になったとすれば最高だ。

高揚感ともう一人の自分

合奏を最初と最後に持つてきて間に独奏を一部と二部に分けた。ゲストで今はなき小山さんに数曲歌ってもらった。その他松尾さんと二人でソルの「アンクラージュマン」(慰安)をやった。後で聴いてみると、一番酷いのはアンクラージュマンだった。テンポが速くて難しいパッセージになると決まって速くなっている。それもチョットやさそとではなく恐ろしく速い。自分でも笑ってしまうほどだ。やはり相当あがっていたのだと思う。高揚する場面では誰しも気持ちが高ぶるのは人間の本性だ。しかし一方で高揚する自分を冷静に見守るもう一人の自分が必要だ。自分だけで勝手に高揚してしまい、テンポ感を失ってしまう。これは今でも、唄の伴奏などのときによく言われる。曲が高揚する場面に来ると、ついつい速くなってしまふ。

「すぐれたギターほど、美しい

ものは他に考えられない」

(シヨパン)

コンサートでは、小山さんが歌う「夜の伝説」を伴奏した。ほとんどコード弾きの、あまり音楽的な伴奏とはいえないが当時としてはまあ仕方のないところか。今ならちよつと気のきいたイントロを入れたり、コード以外の経過音など入れてもう少し味のある伴奏をしたいところだ。

見事(?)な空振り

前回「あがる」ことについて書いたが、独奏ほどあがることはない。演奏する作品に対しても聴衆に対しても全責任をたった一人で背負い込むのだから。そのプレッシャーたるや、ものすごいものがある。出番が近づくとつれ、心臓がだんだん高鳴ってくる。緊張感が押し寄せてくる。

前回も書いたが「私ぐらいの年になってもこればかりはどうしようもない、誰か助けてくれ」(ステージ演奏前のカザルス80代の言葉)が良く分かる。一体どうしたらあがらないで演奏できるのか。こればかりは死ぬまで仕方がないことなのだろうか。

いまや世界的なギタリスト

として活躍している村治佳織が書いていた。彼女の両親は4歳からギターを教えたのだが、その頃からコンサートなど人前で弾く機会が近づくとお父さんとお母さんが部屋に椅子を並べて座り、隣の部屋から彼女がギターを持って出てきてお辞儀をし、それから座って演奏を始める、という「訓練」をしていたそうだ。

習い始めた頃からそういう経験をつんだお陰で、あまりあがるという経験は彼女にはないようだ。もちろん彼女ぐらいになれば曲に対する理解、構成力、そしてそれを余裕を持って演奏する確実なテクニクと音楽性があつてのこととは言え、なるほどそこまで考えて指導していたのかと感心する。

第二部のトリでビラ・ロボスの前奏曲第一番とアルハンブラの思い出を弾いた。なんとか止まらず、間違えずに弾いたのだが、前奏曲では最後の最後「よし、弾ききったぞ」と思い、つい力が入ったのか最後の一言(六弦の開放弦)を空振りしてしまい、あわててもう一度弾くという失態をやらかしてしまつた。せっかくノーマミスだったのに、最後の最後であーあ。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。

今となつては良き思い出である。



びわこJAZZフェスで演奏するダンナイズのメンバー

モーツァルトのピアノ

武満 徹 のうた

ピアノ・うた 吉村安見子
アコーディオン 檜山 学

2012年2月22日 (水)

18:30開場、19:00開演

旧東京音楽学校

奏楽堂

(上野公園内・JR上野駅公園口徒歩10分)

チケット前売り3500円(当日4000円)

申し込みは小川まで

jicogawa@jca.apc.org

自治労音協滋賀支部報告

自治労音協滋賀県支部 西藤安彦

7月には大阪心斎橋のライブハウスに進出

滋賀支部では、毎月1回以上の定期的な練習を目標に、歌唱力、演奏力の向上を目指し、日夜励んでいるところではございますが、どうも「ライブが決まらないと練習をしない」という悪い癖が見え隠れしております。

そんな中、自治労滋賀県本部のテーマ曲「未来へのかけ橋」を作り上げ、1月には、県本部の旗開きで披露しました。(私は、会計検査のため泣く泣く欠席) 4月には、ベースの大國君の地元で

ある東近江市で開催された「びわこジャズフェス」に2年連続でエントリーしたのですが、「早く演奏を終わらせてビールを飲もう!」という魂胆で無理矢理、出番を朝一番にしてもらいました。

7月には、私の地元である守山市市民病院でのロビーコンサートに依頼があり、さすがに病院のロビーでの爆音はダメだということで、エレキをアコギに持ち替え、アコースティック

クのライブを行いました。同じく7月末には、「びわ湖ジャズフェス」で仲良くなった大阪のバンドさん主催のライブに声をかけていただき、大阪心斎橋のライブハウスで演奏を行い、大阪進出を果たしました。

年度後半は、特にバンドとしての活動はありませんでしたが、個人的には、地元の駅前でのイベントに出演したりしてました。今年も滋賀支部をよろしくお願いいたします。

「よみがえった気仙沼市民吹奏楽団」

荒川区職労 白石 孝

前号で気仙沼市民吹奏楽団に楽器を贈った報告を書いた。届けたのは5月21日。それから半年、とうとう被災地に楽器の音が響き渡った。

12月4日(日)午後2時から、気仙沼市本吉地区(旧本吉町)の「はまなすホール」で、第24回定期演奏会「復興への想いを込めて」が開催され、団員約40人が演奏、市民など300人が聴き入った。

当初、はずせない予定が入っていた行くのは無理と思い、メッセージを送るつもりでいたのだが、急遽行けることになった。東京から新幹線で仙台へ、仙台市職労の友人と合流、彼の車を運転して気仙沼を往復、その日のうちに帰宅するという強行軍だったが、演奏会に立ち会えたことは何よりの思い出となった。

演奏会は2部構成、第1部は正装で吹奏楽オリジナル曲を3曲、「狂詩曲ノヴェナ」「序曲バラの謝肉祭」「風紋」。

第2部はお揃いのポロシャツとジーンズ姿で「バラエティステージ」として「アニメワンピースからウィーアー!」「上を向いて歩こう」「いきものがかりコレクション(メドレー)」「江ノ姫たちの戦国」「サウンド・オブ・ミュージック

ク(メドレー)」、アンコールで「千年の風」「ラデッキー行進曲」。選曲は、被災地の今と明日とを表現するものがメインを占めた。

団長の小野寺晃さんは、気仙沼市役所の係長、その彼が2部の冒頭で聴衆に語りかけた。

「私どもの楽団もこの震災の影響により、団員が気仙沼から離れ、楽器が流され、そして練習会場が被害を受けたりして活動停止を余儀なくされました。しかし、東京の文化団体「荒川サムルノリを観る会」様をはじめ、元団員・様々な方々からの物心両面に渡る暖かいご支援のもと、避難所などで慰問演奏を開始し、9月からは一関市室根町公民館をお借りして活動を再開、本日の定期演奏会開催へと至りました。今、気仙沼市は復興の緒に就いたばかりですが、その道のりがどれほど長く険しいものであっても、必ずや成し遂げられるものと信じております。そして、私ども楽団も音楽を通じ「心の復興支援」の一翼を担えたらと思っております。」

演奏は「失礼」ながら予想を超える素晴らしい出来で、アンサンブル、ソロパート、選曲すべてに合格点をはるかに超え、涙がこぼれるのを止めることは出来なかった。